越冬を振り返って

昨年に比べて求人が減り、加えて行政の福祉見直しが叫ばれ、切り捨てが厳しい冬の釜ヶ崎で、労働者による第十一回越冬闘争が十二月二十五日～一月三十一日まで行われた。釜ヶ崎にかゝわるキリスト者がこれを支援して六年。今年も協友会とKUIMで「キリスト教釜ヶ崎越冬委員会」を組織してさまざまな活動を行った。その総括集会が三月八日、ふるさとの家で開かれた。

越冬の日常活動　○○

越冬の日常活動は次のようであった。まず朝六時、大阪社会医療センターの軒下に敷いたふとんあげをする。前夜のパトロールで一日平均百人がふとんに保護されたが、そのまゝだと医療センターの日常業務に差しつかえるので、早朝にふとんをあげ、それを保管する。

七時半、病気の労働者に「診察依頼券」を発行し、医療センターに連れて行く。これは、釜ヶ崎の現実に即して医療センターが「有る時払いの催足なし」で発行を許可するもので、越冬期間中は「越冬闘争実行委員会」でも発行することが出来る。医療センターの診断によって、措置の必要な人は紹介書をもらい、大阪市立更生相談所へ回わされる。市更相での面接結果確認（入院、却下、その他）の全過程が終わるまで行動を一緒にすると、午後四時半になる。これが毎日繰り返えされる。

一方、西成署裏の通称海道公園では、「炊き出しの会」による炊き出しが朝九時、昼一時、夜七時の三回行われた。炊き出しの時間になると、仕事にアブれて金のない人、病気、高令、「障害」の人たちの長い列が出来る。利用者は一日平均二三〇人であった。

夜八時、また医療センター前にふとんを敷く。十時、おにぎり配りと夜間パトロールが始まる。これで一日の活動が終るのではない。パトロールが終わっても、「シノギ」といわれる路上強盗を防止するため、警備班による警備が終夜続く。その他、毎日の医療・生活相談、病院訪問などが行われた。

越冬日録から　○○○

このような日常活動の合間をぬうように大きな集会や活動が行われた。「越冬日録」からその主なものをひろってみよう。

●12月8日　ボランティアのための結核の話　於　喜望の家　講師は羽曳野病院山口亘医師。

●12月9日　大阪市へ「要望書」提出。今年は民生局よりまがりなりにも電話で返事があった。

●12月18日　第13回釜ヶ崎夜間学校　テーマ「越冬と病気」。以降、毎週木曜日午後七時から喜望の家一階で続けられている。

●12月19日　支援連帯集会　於　部落解放センター。この呼びかけビラをめぐって、釜日労と炊き出しの会が平行線を辿って行った。

●12月24日　喜望の家娯楽室クリスマス。夜間学校との共催で盛り上がった。

●12月25日　協友会クリスマス　於　ふるさとの家。越冬闘争はじまる。喜望の家倉庫にあるふとんをセンター前まで運ぶ。医療センターで診断後、市更相へ相談に行くつきそいの労働者を警察が妨害し、市更相へ入れず。1月6日まで妨害つづく。

●12月26日　西成保健所と団体交渉。

●12月29～31日　臨時宿泊所の受付け　南港に八百人、自彊館に二百人収容。

●1月1～3日　第5回越冬セミナー　於　喜望の家　テーマ「釜ヶ崎の医療ー特に結核」。

●1月2日　新春団結もちつき大会　於　三角公園　四斗を二カ所でつく。越冬実　医療券発行数一一六枚を記録。

●1月4日　ソフトボール大会　於　東大阪市職業訓練所。

●1月5日　大阪市交渉。センター仕事始め　39件二六六人、アブレ（雇用保険）一〇二九〇人。

●1月10日　臨時宿泊所終り。この日青カン総数一六五人。

●1月17日　大阪市環境保健局との話し合い。

●1月18日　炊き出しの会、結核患者の会街頭デモ。

●1月30日　労働者と二月からの活動について話し合う。於　市民館。その結果、一月一杯でパトロール、ふとん敷き、警備は終る。医療班は継続することになる。

●1月31日　第12回キリスト教越冬委員会　パトロール終了後、昼の活動に力を入れていくことを話し合う。

●2月8日　釜ヶ崎越冬支援中間報告集会　於　カトリック天王寺教会　横浜寿町住民懇談会、寿日雇労働者組合からも参加があった。

●2月17日　第一回ボランティアの会　於　喜望の家。

越冬支援のまとめ　○○

キリスト教釜ヶ崎越冬委員会は、ここ数年「釜ヶ崎の病気」にテーマをおいた活動をしてきた。その点、入佐明美さんの報告が注目をひいた。

Sさんは重症の結核患者であるが、これまでの闘病生活の経験から入院を拒否している。Sさんは現在、釜ヶ崎に近い浪速区で廃品回収をしながら路上生活をしている。入佐さんは、Sさんが入院しないで治療出来る方法はないかと多方面に働きかけ、浪速区役所に居宅保護と投薬を認めさせた。一人の患者が治るのに、ただ既成の方法だけでなく、大胆な方法の開発として見守って行きたい。

今冬は二月末に寒波が押しかけ路上での凍死者が出た。キ越冬委ではパトロールを一月一杯でやめたことに対して厳しい意見が出た。

しかし、越冬は単に救済の活動ではなく、むしろ抑圧者への反撃の闘いとして、越冬前と後の活動を一体のものとして団結を強めることにある。その意味で、今越冬は病気の人は入院、働ける人は仕事へ行くことを徹底したし、新しい運動への展開を評価することが出来る。

キリスト教も医療連絡会として病院訪問、医療相談、患者交流会、ボランティアの会、また労働者の家オープンに向かって新しい運動を展開しようとしている。越冬は終わっていない。

ミニ・ニュース

ボランティアの会

釜ヶ崎を知り、釜ヶ崎に関わろうとする「ボランティアの会」が二月と三月にもたれた。これは、去る二月八日の越冬中間報告集会のときの呼びかけに応えて集まった人たちで、午前中は話し合い、午後からはボランティアとして活動をしている。

第三回　ボランティアの会は四月十四日（火）午前十時から十二時　於　喜望の家

▽すでにボランティアとして活動している人との交流

▽釜ヶ崎の街の実態（スライド）

あなたもどうぞ。

SCM現場研修

学生キリスト者運動（SCM）の第三回現場研修が、KCC（生野）と喜望の家（釜ヶ崎）で開かれました。釜ヶ崎では九人（男六人、女三人）が参加。昼間は日雇い労働や協友会で働き、夜、セミナーをしました。今回はこれまで参加したことのある人が学生スタッフとして参加してプログラムを推進しました。

ベビーセンターの礼拝に参加したある学生は「釜ヶ崎では聖書が日常生活とすごーく結びついている」と話していました。

しかし、いつも思うのですが、若い人の感受性って、すばらしい。

春を見つけに

三月十五日、野崎参りの歌で有名な野崎から飯盛山へ春を見つけに出かけました。山王子ども会、日曜学校、日曜礼拝、むすび会からこども二四人、大人一九人、計四三人がよっこらよっこら登りましたが、山頂では山くずれの跡で滑りごっこをしました。また、紅茶をわかして頂きました。桜はまだ固いつぼみをつけていましたが、急に暖かくなって、今は花を開いていると思います。今度はいつ、どこへ行こうかな？　意見のある人は聞かせてください。またみんなで出かけたいと思います。